

一緒につくろう、これからの多文化共生社会

「多文化共生」—この言葉を聞いて、あなたは何を思い浮かべますか？

JICAでは、この多文化共生社会の実現に向けた、様々な取り組みを行っています。

多様で包括的な社会の実現のために、学校で、地域で、どのような視点や活動が求められているのでしょうか。

今回のコラムでは、学校や地域で「多文化共生」に取り組む当事者から、現状や取り組み、さらにはこれから目指す社会像をお聞きしました。

学校での多文化共生に向けた活動事例

事例

①

「ちがい」を尊重するあたたかい環境づくり

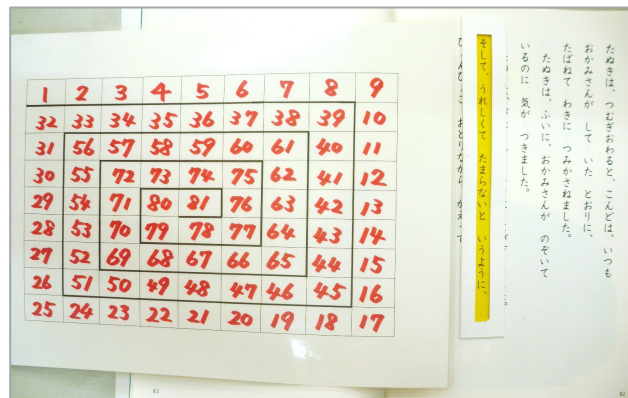
大和市立上和田小学校（神奈川県） 執筆：兵頭 絵梨先生

本校では、外国につながる子、特別支援学級に在籍する子がそれぞれ6%います。

子どもたちの多様な背景を踏まえ、互いの「ちがい」を尊重し、ともに成長できる関係づくりを目指しています。

1. ゴールまでの道のりを選択できる環境をつくる

右きき用・左きき用のハサミがあるのと同様に、子どもに合うツールはそれぞれちがいます。音読スリットや、かけ算九九すごろくなど**みんなでゴールを目指すための手立てを、子どもと一緒に考え、選ぶことができる**よう工夫しています。「**誰かにとっていいものは、みんなにとっていいもの**」と考え、それらはいつでも手に取りやすいところに置いて、誰でも使うことができる環境を作るようにしています。



2. ちがいを否定しない雰囲気をつくる

自己肯定感が育まれていないと、子どもたちは 周りとのちがいに自信がもてず、自分や友だちを否定してしまうことがあります。本校では、子どもたちが**互いを大切な存在だと認めあう体験を重ねられるよう、あたたかな雰囲気**の学級づくりを目指しています。校内研究では「相手の意見を尊重する雰囲気づくりと伝え方の工夫により、子どもは自分の考えを持ち、相手を意識して伝えられるようになる。」という仮説の元に、教員同士での研究活動を実践しています。今後も授業やワークショップを通じて、子どもたち同士のあたたかな関係づくりをサポートしたいと思っています。**職員が互いの工夫を共有しやすい環境**であることに感謝し、私自身も学び続けたいです。

(左) かけ算九九すごろく：算数の苦手な児童が、楽しみながら学べるもの。

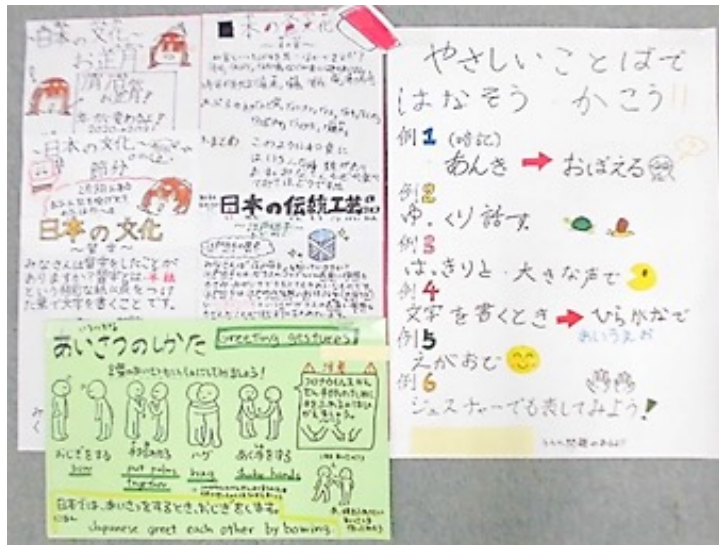
(右) 音読スリット：とばし読みをしてしまう児童にとって、読む箇所がわかりやすくなるもの。5色のうち黄色が人気。

学校での多文化共生に向けた活動事例

事例
②

児童や教員が体験的に「多様な考え」を理解する 神戸市立義務教育学校港島学園（小学部）執筆：石動 徳子先生

本校は外国につながりをもつ児童が全体の12%(約20の国・地域)を占めています。彼らが安心して「自分」を発揮できると共に、多様な文化に触れる環境を生かして、他の児童も広い視野を持ち、様々な立場にある方に寄り添える人になってほしいと願っています。



「港島ワールドプロジェクト」(6年総合・11時間)

1. 地域の特性を理解し、“外国人”になるとどんなことに困るか考える。
2. 国際教室の児童や支援者の話を聴き、また越境(疑似)体験を通して、思いを理解する。
3. 自分たちができる協力や共生について考え、実践する。

「港島ワールドプロジェクト」より

国際教室の児童からの発信や疑似体験などを通して、児童が自分事として捉えることができました。「やさしい日本語」について調べたり、これまで以上に外国につながる児童と関わろうとしたりする姿が見られました。今後は、学習を終えた6年生が、中学部の生徒や地域へも発信できる環境をつくりたいです。また外国につながりをもつ児童が安心して学べるためには、**教員全体の理解が不可欠**です。年度当初と夏休みの2回、児童理解研修を行い、その中で**教員が体験的に児童の困り感に気づくようなワークショップ**も行っています。たとえ専門的な知識や経験がなくても、教員の児童へのまなざしが、彼らを支えています。またその支援は、全児童への支援にもつながります。今後は、中学部でも同じ土壌をつくっていけるよう、合同で研修を行っていきたいです。

教員研修で使用したPPT資料より

※知っておいていただきたいこと
日本語を話している ≠ 授業で学習する内容が分かる

・生活言語能力 **習得するのに約6か月**
→学校で、先生や友達との関わりの中で身に付けていく。

・学習言語能力 **習得するのに約5～7年**
→授業の中で培われる。
授業の中でしか出てこない日本語が、私たちが思う以上に多い。
また、同じ言語でも、教科によって意味が変わるものがあることに注意。

例:5年社会「人にやさしい自動車づくり」⇔「環境にやさしい…」
ようす…国語「人物のようす」⇔理科「種のようす」

地域での多文化共生に向けた活動事例

執筆：横浜国際交流協会鶴見国際交流ラウンジ館長補佐 沼尾実さん



横浜市鶴見区は、昔も今も多文化**共生**のまち



横浜市鶴見区の外国人の人口は、2021年12月末現在13,397人で、横浜市18区の中で2番目に多い区です。鶴見区は1920年代から朝鮮半島や沖縄からの人たちの集住が始まり、1990年の入管法改正によって南米からの人たちが急増・集住しました。そのため、鶴見区は**早くから多文化共生が進んできた地域**なのです。鶴見区に住む南米ルーツの人の多くが、戦後、沖縄からボリビアへ移住した人たちの関係者です。ブラジル、アルゼンチンなど各国からの人たちも、元々はボリビアから転住した人たちであることが多いです。その後、中国やフィリピンからの移住者が増加していましたが、近年は、ベトナム、ネパールからの移住が急増しています。



子育てから、
だれもが安心して**豊**かに生活できる場を

多文化共生とは「だれもが安心して豊かに生活できること」。その考えのもと、「多文化共生のまち」を目指し、鶴見国際交流ラウンジは事業を実施しています。新規事業として「**子育てをテーマとした共生の地域づくりと地域人材育成**」に取り組んでいます。共生の地域づくりには、外国人と日本人が地域の成員として認め合うことが不可欠であり、その実現には、乳幼児からの「子育てつながり」の継続が大きな力になります。保育・幼稚園のつながりをはじめとする地域の「子育てつながり」が継続し、小・中学校や地域子育て支援機関、自治会・町内会などでさらに広がり深まっていくことが、互いに地域の成員として認め合うことにつながります。そして、**成員と認め合った外国人と日本人が、多文化共生の地域づくりの原動力となります。**

鶴見国際交流ラウンジは、多文化共生に共感する共生型外国人と日本人の地域人材育成に取り組み、人と人、組織と組織をつなげて、多文化共生の地域を目指していきます。外国につながる人たちから、**自分の価値観ではわからなかった「安心とは・豊かさとは何か」**を教えてもらいました。出会った人たちが、**安心できてないこと、豊かでないことを伝え合い**、人・機関・地域とつながり、自分自身も含め、これからもだれもが安心して豊かに生活できるように動いていきたいです。

研修報告

JICA地球ひろば「多文化共生の文化」共創プログラム

JICA地球ひろばでは、“学校で多文化共生の「文化」を創る”ことをテーマに、全国から14名の教員を迎え、11/7～12/12に全3回の研修を実施しました。

第1回研修では、JICA東京国際協力推進員 海老原周子（えびはら しゅうこ）さんに「未来に続く『多文化共生』を実現する文化づくりー地域・学校での居場所づくりを通じて、子ども達が教えてくれたこと」をテーマにお話を伺いました。これからの学校において、多文化共生の文化をつくるために、視点や考え方、多文化な場づくりの工夫、多様な子供たちを受け入れる仕組み・体制を考えました。



第2回研修では、フィールドワークとして鶴見国際交流ラウンジにも訪問し、参加者は「多文化共生の文化を創るとはどのようなことか」「学校で多文化共生の文化を創るために必要なことは何か」について、ダイアログを通してその考えを深めました。

研修の成果として、各参加者が学校で行っている取り組みや、これから取り組みたいことをまとめた冊子を作成し、配布を予定しています。

自分の住む地域に、勤め先に、通っている学校に、外国をルーツとする人はどれくらいいるのでしょうか。そしてその方々は、自身のアイデンティティをどのように捉え、暮らしているのでしょうか。また、それ以外に暮らしにくさを感じているのはどんな人たちなのでしょう。一人一人がその在り方を尊重されるために、まずは知ること、思いやることが「だれもが安心して豊かに生活できる」地域や学校をつくるための一歩になります。

JICA地球ひろばや地域の国際協力推進員と一緒に、そんな「多文化共生」に取り組んでみませんか？